

清水 茂 著

地下の聖堂

詩人 片山敏彦

88・11・20刊、四六判276頁、3000円

小沢書店

—詩人は日毎に地下の聖堂に
祈り、樹の梢を 歌ふ琴に交
へる— 著者はこの詩句の中
に、片山の魂の内奥の在り方を
直感している。幼時へと廻行し
て「自己」の中心へと帰
還してゆくことによって、詩人
は「地下聖堂」に辿りつく。片
山のミニスティックな詩の世界
と、彼の生の軌跡を書くにあた

もはや二度の世界大戦から遠
く隔たってしまったかのよう
に思える今、ヒューマニズムに廻
って反戦活動を展開した「倫理
的」な作家ロマン・ロランの諸
作品は、日仏両国においてほと
んど顧みられていない。そして
日本におけるロランの紹介、翻
訳者としてのみかすかに記憶に
残る片山敏彦について、若い私
たちはなお知らぬものが多い。
清水氏は「長年精神的な道
づれ」として自分に先だって歩
いてきた片山敏彦を、あらため
て「詩人」として再生させ、「慈
しみ」をもってその内面に分け
入った。

詩人・片山の幽暗な内部へ

ロランと同質の光によって射ぬかれた魂

今 橋 映 子

よって射貫かれているのを読む
時、そこにこの魂の深い照応
を見ないわけにはゆかないから
である。

著者は一象徴性を通じて、詩
的形象を内側から形成してゆく
独自の詩心の働きを見きわめ
た上で、だからこそその片山が
見出し得たゲーテやロランとの
出会いを語る。それは影響や感
化という問題ではない。みずか
らの内面に超越的な実在である
ものを実感する者が、同様の魂
の「無限に」手やかな歌のため
に「片山」を直観的に了解
し、愛する過程——シュペル
トの音楽『内面の旅路』の
詩人ロラン、『ドイツ詩集』に
おけるホフマンスタール——こ
れらの対象との関係が、単なる
憧憬や尊敬というレベルとは全
く隔絶したものであったこと
そしてさらにヨーロッパへの
旅が、そのまま精神の故郷への
旅に他ならなかったことが、お
のずと明らかになっていくので
ある。

私の心は幸福に酔ってゐた。/
永い永い歲月の、忘却の波を
ぐりながら、/名前も半ばは失
ひながら、いったい私の生活の
/何処に隠れてゐたのだ。白く
新目のやうな、かすかな一つの
輝きよ。」

本書の後半ではさらに、片山
の「内面」の意味付けがより深
化され、彼の内部の幽暗な生が
無限に開かれた別の世界（ヘカ
ラの呼ぶ所の〈夢〉）と不断の
交わりをもつことが示唆され
る。詩人自身が「創造的ヴィジ
ョンの本質は、内在的であって
同時に超越的である」と述べた
ように、片山の詩が「可視と不
可視現在の知覚と遙かな回想、
ときとして瞬時と永遠そして、
また、個としての私たちの存在
と私たち自身の内部で私たちを
超えているものとの一致するこ
と」で「成立して」と結んだ
著者のことばは、深く、鋭い。
「一九八四年夏、北軽井沢」
に始まり、「一九八八年夏、野
火止」に終わる「連のエッセイ

つて、その「内部へと回り込ん
だ風景」こそを捉えようとした
筆は見事（こ）か言ひ様がな
い。なほなほ、一般には「倫理
的」な作家と屈われ敬遠されて
くるロランという作家が、実は
「許されるならば」生（夢）の
世界にとどまっていたかもしれ
なかつた」と彼自身言うほど内
面的な詩人であることを知る者
にとつては、片山が同質の光に

前著『ロマン・ロラン—精神
の蜜房』と同様、一人の詩人を
その内実から捉えてゆくという
手法によって、従来の片山像、
延びてはロラン像を顛倒させよ
うとする試みが、この静謐な文
章の底に、深く秘められている
と読むことができるだろう。
「そして此の小さな花の薫り
みいたな、又は明るむ音楽のや
うな（微笑のゆゑ）、夢の中で
（東京大学大学院・比較文学）
れを夢想している。」